

(アゲマツ) 町を主産地として以南に散見する。此の分布状態は北上したと見るよりも、1000 m 位の低い山稜を東へ越えて来たものと見るべきかもしれない。後者は東北地方の南半、関東、中部、東海諸地方の 1000 m 前後の山地を占めるが、上松よりも北～西部の谷間に多産し、南半では木曽川支流の溪谷（本流々域よりも春が遅い）にはこれが多い。両者は別種とされているが、大きな差は花柱下半部の粒状腺の有無にしかないように思われる。従って東西に分れて分布する変種の関係に置くのも良いと考える。そうすると木曽谷は本州特産のトウゴクミツバツツジ（ダイセンを含む）の両地理的変形が相接する場所となる。此の関係は九州、四国から紀伊半島に分布するトサノミツバツツジと上記のミツバツツジにも当てはまると思える。即ち前者は 10 雄蕊、後者は 5 雄蕊という差を持った同一種内の変種同志となり、分布域の北東部に産するミツバツツジのみがあることになる。こう見て来ると木曽谷には西南日本系のミツバツツジ、コバノミツバツツジと本州西南部～北部南半に分布するトウゴクミツバツツジ（広義）とを産し、ミツバツツジ類全体として考える時、分布域の重心は西南に偏したものとなる。これは木曽谷に暖地性植物を数多く産するという事実と合致した現象である。

此の小文を草するに当り、東京都立大学の水島正美氏に負うところ大である。記して感謝の意を表する次第である。（長野県西筑摩郡玉滝中学校）

□ Darrah, W. C.: **Principle of Palaeobotany** pp. 295, 63 figs. The Ronald Press Co., New York (1960) 6.5 ドル

著者はゲテスバーグ大学の生物学副教授で石炭紀を主専攻とする古植物学者。本書は 1939 年に出版されたものの再版である。内容 23 章の内、初版の第 6 章の「プシロプシダ(統)」が再版では「デボン紀の植物」と改題され、デボン紀のフロラがまとめて述べられている他は、各章の題目は変わっていない。しかし初版の 236 頁が再版では 295 頁とふくらみ、この 20 年間の新知見が加えられている他、図が多数ふえていいる。殊に Mägdefrau, Seward その他から引用された各地質時代の生態図が十数葉あるのが楽しめる。

植物分類群を縦にまとめて記述する他に、デボン紀・石炭紀・中生代・白堊紀・新生代等各時代の植物を横にまとめてフロラについても言及している古植物学の本はめずらしい。各植物群中の科・属の記載は簡単に要領よく書かれてあり、解剖学的特徴もあげられているが、解剖図が無いので、それを理解するには相当の解剖学の素養が必要である。文献として植物学の教科書や論文が可成り引用されている。例えば Bailey 等の材の研究が針葉樹類や被子植物の進化や起源に関してしばしば引用されているが、その点「植物学的な古植物学」であるといえる。古生物学はもちろん、分類学、形態学、進化学

を専攻するドクターコースの教科書として手頃であり、それらの学生はこの程度 of 古植物の知識は常識として知っておくべきであろう。(西田 誠)

○牧野標本館雑記 (3) (檜山庫三) Kōzō HIYAMA : Miscellany from Makino Herbarium (3)

コウヤイタドリ コウヤイタドリ (*Reynoutria hastata* Nakai) というものは、イタドリに比して葉が細長く葉脚が戟形をなしたものであって、はじめ紀州高野山のものに對して、中井猛之進博士 (宇井縫蔵 : 紀州植物誌 337 頁, 1929 年) によって、この名が与えられ、1938 年 11 月に改めて正式の発表を見た。また本田正次博士は、中井博士と同一標本に基いて *Reynoutria japonica* Houtt. var. *hastata* (Nakai) Honda として発表されたのが奇しくも 1938 年 3 月であったために、本田博士の変種名が正式発表としては一番早いことになる。その基準標本は高野山の産で、他に上州〔原典には信州とあるが〕熊ノ平が産地として挙げられたが、いずれも花も果実もない標本である。牧野標本館にも牧野先生が採集されたコウヤイタドリの標本があるが、その産地は紀伊高野山 (1919 年)、伊予上浮穴郡岩屋山 (1931 年)、面河溪 (1940 年)、摂津六甲山 (1934 年)、和泉岩湧山 (1938 年) で、いずれも sterile の標本であるが、別に長門熊毛郡大和村 (T. Niyama 氏採集) 産のものがあって、これのみが花果ある標本である。以上の標本によれば莖は瘦せ、高さはおおむね 50 cm 以下、葉は一部又は大部分が戟形をなし、下葉は短広鈍頭で著しく戟状を呈するものが多く、上葉は狭長でかなり著しくとがってくるかわりに、葉脚が戟状とならぬものがある。

このコウヤイタドリはイタドリの生ずる地域にたまたま散発する、イタドリの単なる異形品であって、ケイタドリのようなある程度特別な分布区域をもつものでもないから、品種 (*R. japonica* forma *hastata* Hiyama) として認めておくのが妥当であると考ええる。イタドリは地下莖による繁殖が盛んであるから、場所によってはコウヤイタドリ型のかかなり著しい群生も見られるが、この型では花の咲くものが少ないという事実がある。

なおコウヤイタドリは杉本順一氏 (植物界 1-1 : 13, 1926) のホコガタイタドリと同物であると思われるが、後者の方がより早い命名である。

Reynoutria japonica Houtt. forma ***hastata*** (Nakai) Hiyama, stat. nov.

Reynoutria japonica var. *hastata* (Nakai) Honda in Bot. Mag. Tokyo 52 : 140 (Mar., 1938).

R. hastata Nakai in Journ. Jap. Bot. 52 : 741 (Nov., 1938).

——— Nom. Jap. Kōya-itadori (T. Nakai), Hokogata-itadori (J. Sugimoto).

Distr. Hondo : Kozuke, Kii, Izumi, Settsu & Nagato. Shikoku : Iyo & Tosa.